

雜
譜
世
說

①



誂諧世説卷之四

目録

北枝蕉翁ふ養と信在 風狂堂の説

乙川白と張家とつう説

東死坊禪室と於誂道入説

交考長崎逗留の説

交考巴静素名同叙の説

涼菟苑と尋肥前よ至説

涼菟辭世の説



信化蕉翁小作此依と結説

尼智月蕉翁小形見を乞説

北枝舎羅と吊説

舎羅和説小逸説

李東白と吟一歌と去説

句空蕉翁と考心説

或人麦林ふ白の姿と同説

麦林能里に通説

誄諧世説卷之四

北枝蕉翁小妻と傍系風流堂の説

芭蕉翁小圃行柳の村小枝の案也と野田のふか
とくふをあらびあり死後より小枝をけりまといふ
いふ物なりと翁小妻のふりてに翁そとを採
し給ひてこれぞとてこゝに給ふ其時小枝のふに
翁をぞ故屋けりまをさしひたり 小枝
ふりては真妹も又一格なりとてさうり又其らら
るゝ菅葉を結くといふ

まゝもほつあゝ兼の初巻也 小枝
け兼惟然切附屬一福如姫侍子山工傳りせれ
子寒瓜増位ととくつふて風流堂とつとををを
はまの瓜納む

二川句と強家と考説

二川句強中富山の産うてその右守れ家
ふはく一そのあり一がたゝいゆふ成候もん少
を強ひて居らりあゝまのまゝくはくを考一故ふ
まゝもけ人を少くおここり加忠の湯なごて

其是を羈ととけけいありとまゝ係り強
強候そらふふら青入道とるりて其國とまゝとて

系くも係人ふおとゑ一き 二川

かく紙丸れ侍子小枝一ゆゑ新り紙ふまゝ人
めりようけいものを情まれり控がさおろる答めんも
まゝ呼吸して強者とる一別ち安山のうらに
紫のいぢらとむとびて一せ紙すう一りふとを

東花坊禪室を拾誂通入説

東花坊交考らるは流の産うて初見ハ禪室

言言七言
入
二
へく法苑司とつりみ年此ら落

吹毛劔也春三月

腸断牡丹花下風

とく偈成依りて宗門乃くくも未頼とく
出れ一才傍り東都とくもつる寺に大會に碧
巖に溝を以ハケ糸の回を揚て融凍をそれり
法眷其才を少くみ出せのさつりとさつと左子
猱機をくらひてくむそのに依りてくぞんてくも
旅をうまよりして紳学城好を伊勢るる志人

をりてえく山田れあさうに身をよせぬらふ控て
つらとるく風濤家もあさうみ交り其内に涼菟
さるとむらさくく其英氣小感一其才城情
こ涼菟を幼先後うき洩潜をすめて終り蕉
翁の門人といさぬ果して其才ひま一かく後
葛れ松原を述初り讀五論と撰一初御を東
死西死のあ集ふ名さく実一編ふけ荆棘と切
をくた天下に正風の道成を一今にゆつても蒸
花の道をる國ふとれあさりハゆくよ支考の

大功といふは彼の伊勢を神学に於るはも
 つまは俗形を之を俗形を守りて居るなり然るに
 小運二坊となりてハ肉含るもの放縱も有りける紙
 衣法服是は戒えても一髪落せば其せぬと
 牛にるるく〜といふ事ふ支考ありぬ

牛にかね合点トヤ新慶文涼 支考

支考長崎逗留の説

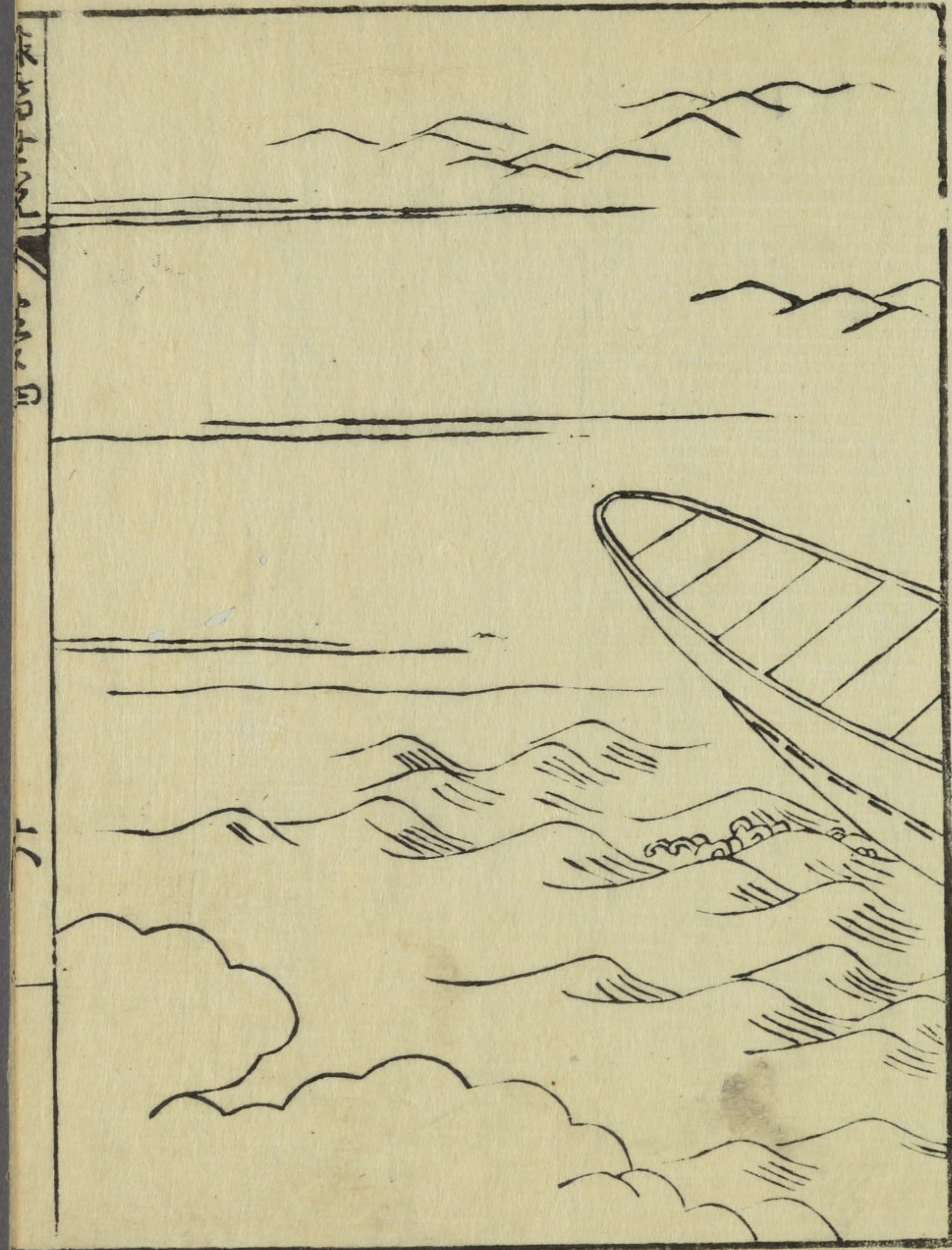
支考西花畑と号し西武行脚のハ長崎に暫く
 杖とてむそこの外七といふ純土ありりともう長

崎を蠻船往來の港を官人の門たつた此商
 賈の後も番兵と好ことのけう中華に酒席を
 飲ふ外七が社中ハ通譯の官人もあはれんと
 るくく唐音と番語をとまう中ういふて風
 流の形もそのも多うりある時練席終て皆
 ぼんとする時西花畑をばるる人ふ向ひそふの
 チヤウチとを給るる〜といふれは皆く其
 ひよりりて其は番音紙唱る者とのづら〜怪り
 て其りは其止ぬとて後小面白れあつて〜

夫者巴静素名同船の説

夫者甚二房と交名して後尾張の巴都と云ら
 つて伊勢に國へ歸るとして素名の後舟に乘付りぬ
 以ち去りもきささうにるらんをふいよご家白うり
 るれうのいすも被草に交り雲雀の草唱を
 系ぬ交りやもまやうに洋くたる河白青を交
 してなる系交をといと奥の船日ありきあり巴都切ら
 肯成をいれく云やうけ風系何を交りくさんや歌の
 くの白うりんとて四ふ切やうも様始ある歌つてこそ其子

へうく風雅ふ志ありとのと歌母くさういれ其今
 の詞を交て其風流をえ流りけりてつて巴都んね
 ぶれ其くさうたるを交りぬるも坊の田吉人も系ふ交
 ての唾にとつてを交りぬ風系十ふを交りての發白の
 出りのふありだもいけ系ふ發白をいれとさうさうの
 風真をうく胸中にをりみまくりのま今宵何方
 ともあ終合うおるんを交りてそのの巨魁ふ葡萄
 して扱白残葉にさうとさうとて様々其藝をを様
 けりるその胸中のま様乃びけりあてりる物さういれ



五

五



五

五

涼菘花を尋ね奉る至説

涼菘花を伊勢ふ名あつて流土して其の白くは涼菘花白
 集めりあるものまらつちうら花をくんとてか
 と名ふ名も藤もきて出で二三日梅はうら一丸ふ家内
 とあやしみ思ひそまの花のりこそ人してあつて
 よあつちのつる藤うけ花をとんく京都を東山のけ
 し花を思ひ出たまをいひきりいへやこやあつて
 らんと云ふ叶を移さつては京師の定宿(使)とて
 あつてのつるつるなつた上(定)宿(使)とて流土して

の極悪しなる物語ありて河戸寺人や新橋ふ
 らんとつる又を移らうして花をりて是と名ふ
 の流土も藤もきて出で二三日梅はうら一丸ふ家内
 とあやしみ思ひ出たまをいひきりいへやこやあつて

涼菘解世の説

涼菘流馬の宿中にあつては維久れ枕頭ふは
 そい居らう今や流土とてあつて河門人解世りや
 と名ふ一詞の下にうら目と名ふ

合点とや其説乃ほくは涼菘

とまゆりてちくむをよみぬ長閑をとりけりゆいせの人の
 のまなくあつたつるゆき統もけい白狐曉の甚とせん
 うなごもま林曳り相鏡ありしと結るもるまは
 てみごうくふし多終は甚ふしれと成まるともや
 よう其病を痛疾とて病中詠も

涼菴

今と人か死ぬると思ひに紙書けよこのは合

うきり風流もまはゆ

信化蕉翁小原舟儀と結説

信化の紙中舟波り急あつる浄土ま宗のたぢふ

住し終り風船り志あつて一生れ白とあつて白扇
 葉といふ有りしとせ蕉翁の風船とあつてあふ
 扱もそつふ落柿舎りて翁をむく原舟れ盃酒と
 くむけ事成其角が砥波山葉も死してはむくこれ
 目むくそむぬまは予もくはむくはむくはむく

か入まへ葉巻れまや雄と川 浪化

尼智月蕉翁小原と乞説

智月の如大津のし州が母りて母子たふ風船に
 程のく蕉翁と原とあつる時翁と對面の序と紙

硯を箱のちに備へ紙子れ種うたはせて紙に飛ぶと
 ろくきこの書て紙に紙とを向せられい箱うか
 ば紙さういそらにらた人の飛ぶ紙をまててか
 まい紙とよ志紙といふゆゑと戯れ毎一紙と
 ぞ紙の死もたうそ其後迄と終るらん

それてこそ命おしり終さうと死 智月
 ろくしる名をありしにるり

北枝舎羅と早説

舎羅ハ流美に居て美と風雅な名をいふもの

ろり出まうと入さそを紙芽う新増造とくけてお
 露をそ名だ露をまう神ぞん実ふ後ふの位を
 く物夕うくくしみるく一妾一女と信ふ酒巻と楽
 しし令城の山枝其風流を信くまうんゆうく信
 花ふ拵くつ時を向くけ唐をとむしをうふまひ
 舎羅ハ家におりて日の暮らると結りつりけぬとかく
 しと後もやそくくるりれとあうとほうけの結も
 ろくわし山枝とたえう結く何ぞ後うさぐべさ地やハ
 わりてらひしに舎羅そと日登まの舎羅家行とて

も後く登れおさしりて終る紙幣に茶のつぐ
 焼てとあつせんと云ふ小松屋ぐて立く是を採るに湯
 やく茶の合けらるあらし舎羅云其茶とて四人の
 口紙をさぐへてちう終に後うくる終るにちうせど
 と云ふ小松のあはれもさうと其流のちうとて
 たらふ紙感し入味んして立ぬらぬとぞ

舎羅取置ふ遠説

元禄十三年の句空草菴集といふ紙書を撰す
 其紙書此の舎羅の文をよ

さうくさあしに松吟してゆりくは松志軒
 所よ取置入とらるとしてあつれものどもさし
 ひろんささ入る登れあもつる人さうと仕合の
 る記考とてしほと大盗とらる中にも是こそと
 んりけらるやさねくくぞ

ぬと人もほがらるやう然 舟 舎羅
 と吟して寝しに惟然け地と居るかきなるとて
 ぬと申してよ 福とぬととらふと 惟然

李東白を吟し茶を去説



李東ハ金城ト十村化ふといは 大なるといふ村役とほとめ
をれものト常に風流を好む詠物蹴鞠などの
事とふ好ぶ儀ふ古人の官ハ俗おるると云ふ如く
とつこのふ風流あつうをのびつう友人と云は終
二其門ト冠を挿くまきとて

出でても流う花なり花の塔 李東
と高き了吟詠大衆して出ぬと誠了鐵心賢
園の風人といつた

向空蕉翁を尊し説

向空を令城郊辰ふと住して彦を柳陰軒と
 し蕉門より深切の風土を柳蕉翁の門人とあり
 てよりそのこと朝夕翁を念じて三拍をくちやぐ
 小階の窓を忘寝するその故人ういふことばに翁も
 ろくくろくくしむほひ我仲守とこれ旅寝の吟を
 向空が意好の画賛して

秋の夕ぬらみと兼もさうりけり 芭蕉
 とふ流されぬけり白き意好のほもくくろくろく
 するそ成於人々浮世の妾息をけしめし捨く様

清籠一のち持ちて秋のころるれ心をとりて秋風
 吹るそそ草木零落の時ふもり天比一点に塵埃
 るそと抖擻の身れささんど成述ゆるるものありし
 りとよりけ柳陰軒ふ翁も旅寝杖をとくそ
 けしむと捨ま〜〜か〜〜い捨る

らる柳の〜も秋も捨を〜 芭蕉
 慕ひ〜彦乃やういさうりり判 向空
 下り〜とあり〜か〜まよふれぬ 全

或人麦林ふ白の姿と同説

わる時麦林の菴子案内して入来る人あり彼
 が云衆流結をさびきを此をの結とも其法其武を
 どむらう此處ういそく結る去るがうそあうご結乃
 下悪もうらうぶさ物よと管らる此作の云其道小志
 云人のばさのこむらう一此すま一と音人彼との入
 云發句のうやうれもと一結るもと同作れ云と
 目れおのこむらうと音人結る彼との又いよこ
 とよそを素を結る一らうば一句結りてはさうせ
 くとよばあはるうらうとあうらうとえお一結るよけ

う冬も半やわらうりし鳥へ毎よおのころとを
 ちよ結るけそ妙安を結ぶそわ結が別ら奈
 句のさうごころとそ

百姓乃結るげ妙さむさお 麦林

ちよ一しそれ一とそ又ある者結結れる中結結る
 序よ何と西流我の百韻了馬をいらくと定んお
 何くれま娘ひさいうやうとあうとぐく子ひ結り
 一此麦林の音よ云家ハ何やうれる中結るけり一た
 やうれる成うとあうとあうとあうとあうとあうと

おんこくを法人とすれりるをぞけあつハ細心の
無用をこぶるを修行の近道を行へる清浄者れ
悉造なりん

麦林栞里の通説

麦林知命元年を詔く栞古市なるとの栞りつと
門人春波が書録に云り老後の樂しみを別に
何程もあつて志を栞里れ真を好む栞りつ
の笑ふるにようぬるり致はるんあつんと云
り麦原の家を栞りつに流滞する人の形ら

老ぬきバウ他もとの川に古びゆるものありあくる
をおく栞里ふ交りては毎日を暮らす時のをのびる
先の原情と忘るに栞の中より何れ書るる事
と云ふゆきハ其變化は後とびぬの古くある事
なり家々流滞のあり其志或ち其ふものこと
身修るやぞおく栞里なりぬはゆきとも姣女
と栞をさうつるものなく只其席を何の真と感
て一生樂しむゆきとぞさ栞りつに交りハ老の身
も暮入やとく栞久がゆきと念の思ふをるが

人よりほみぢうり終りふうりも多うけ故いさく
 り親いれ青樓をえりるの陰炭れどく姉婦を呼
 て禽獸とせりるものい甚けりもの悪さあるり豈に
 郭姓女子眾あらしや人冬能人を活しうく人を教
 とハ用ありう終り麦林師の極びやよく用ひる
 人といふぢう感い其ををまとも甚初いをえり
 りいそ評をえりるうと地をてあひあうりぬさ
 春波の物ううとまのあうりまぬ極女れ終り

水仙やそのうらぬぬれぬ終り 麦林

